
vermilion 前章

久蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

vermillion 前章

【Nコード】

N6006H

【作者名】

久蘭

【あらすじ】

七歳にしてルーサザン公爵位と修道騎士団長の座についたラヴィロア。異端の思想を持ちながら、さわやかな弁舌で宗教者としての善なる心を説く男。第一幕において、彼は、修道騎士団という帝国と並ぶ巨大な軍事力を手にしながら、彼はそのすべてを裏切り、捨て去ってしまう。人として抱いてはいけない野心を持つ彼が、すべてを捨て去るに至った理由と、その精神を作り上げた過去にせまる外伝。

透過する小さな世界1（ラヴィロア6才）（前書き）

第一幕投下以降、ずいぶん間があいてしまいました。

たぶん、こちらは第一幕の前の王の時代の話で、エピソード毎に、書き溜まったら投下、という形をとると思います。第二幕もじきに連載はじめますので、そちらもどうかよろしくお願いします。

透過する小さな世界1（ラヴィロア6才）

人には身分と階級があり、そしてそれが人の人生を左右し、自分の心を傷つけるものであることを最初に知った出来事がある。

六歳の春のその日まで、彼はまだ、自身と、その身分について意識したことが無かった。

鉱石惑星を有する領地に、彼の住むルーサザン公爵家の本邸があった。

しかし、当主である公爵夫妻は宮中の社交や古家の貴族としての職務に従事するため、王都サラールオーディンティオス星にあるホージュオン島の邸宅を主たる住まいとして、めったな事では少年に会うことは無かった。

よって、本邸である居城を守るのは、彼、公爵家の後継者たる若君であるラヴィロアと、公爵の母であり、彼にとっては祖母であるロザリン・ベイデノン候爵夫人の二人であった。

居住ドームの中は広大だったので、農場と、そして伝統の手工業の工場が城壁の内外に点在し、小さな都市を築いており、若君は広すぎるがゆえに空虚な城の屋内をあまり好まず、市街地や、農場の周りを取り囲む果樹園と、その向こうの針葉樹の森などをウロウロと、同じような年頃の子供らと散策するのが常だった。

その頃は、天真爛漫が服を着て歩いているような子どもだったのだ、家庭教師や乳母らの目を盗んでは、城外に出て行って市井の子どもらと日がな一日遊び暮らしていた。

公爵家の身内と代々の使用人、それに連なる気心の知れた住民ばかりのドームだったので、誰もその事を危険だと思える者は居なかった。子どもらしい事故はある程度仕方のない事だが、目立たぬよう

に世継ぎを監視する私兵はそこにいたし、見知らぬ者が星に入っていたら、とても目立ってしまうだろう。そして、その星の住人の誰もが、敬愛すべき公爵家の世継ぎに危害を加えることなど、およそ考える者もいなかった。

その日も、リング畑の向こうに広がる小さな森に、何人かの子どもで探検に出かけた。

ベイデノン候爵夫人は循環器系の病を患い、このところは体調を崩して床に伏しがちであり、たまたま若君に対しての監督が緩んだ時期であった。

アストレーデ教における戒律ゆえに、古い血統を守る最上級の貴族、古家の者には、積極的な延命に関わる治療を受けることができない。しかし、平均寿命五十年といわれる古家の中にあつて、病を得ながらもその寿命を越えたことは、候爵夫人の生活に対する節制の賜であろう。

普段なら、自らとも等しく、世継ぎたる若君に対しても厳格に教育と監督を施す候爵夫人である。その候爵夫人が病によって伏した間、若君付きの世話係、メイド次長を務めるセレンは愛くるしい若君が少々羽目を外すことを許してしまった。

それでも、警護長と連絡を取り、充分に配慮はしたつもりであった。

若君たちが出かけた小さな森。

中心部は鬱蒼としているが、それはドームの中に人工的に作られたものなので、本来、迷うほどの危険はない。たとえ小さな子どもばかりであっても、天上ドームに張られた熱源センサーなどが、地上の生体反応を常時監視センターに送る。

幼い子供ばかりの探検隊は、大人ではとても通れない茂みの中の小さな道に行く。

一団のなかの一番小さな少女が、髪の毛を枝に絡ませてしまい、

最年長で実質一団のお守り役である八才の保安部長の息子、ラダックがそれを外すのに一苦労している間、若君は藪の向こうに小さな動物の気配を感じ、その中に分け入った。すぐに戻るはずだったのに、藪の中に入って動物のしっぽを追っかけている間に、左右が分からなくなってしまった。

その時、ふと見上げると、一人の男の人が立っていた。

「迷子なのかい」

その男は言った。

若君の事を知らぬ者などいないはずのその星で、その男は迷子と呼んだ。

「お前は、ダレだ？」

その問いに、男は若君の小さなおでこを指で弾いた。

「いけないな。人に物を尋ねるときは、きちんと言わなきゃ。

自分から先に名乗るべきだろう」

「なぜ、ぼくが名乗る必要があるんだ」

「なぜって、私はキミの名を知らない。」

そうだな、私がキミに名を聞くことにしよう。

私の名はツカサ。

キミの名前は？」

「ラヴィロア。ラヴィロア・ジャザイル。」

お前、本当にぼくの事知らないの？」

「宇宙は広い。」

太陽系連邦と、アストレーデ教団を足した程度の限られた宇宙でさえ、私が全ての人の事を覚えきえることはできないよ」

若君は、男を見上げた。

「お前は、ガイズの人間か」

「外部というのは、このドーム都市の外からという意味なら、そうだよ」

「ボクの事を知らない者に会ったのはお前が初めてだ」

「子供が、大人に対して『お前』と呼ぶのはいけない事だよ。」

お母さんは、教えてくれなかったの」

「母君は教えてくれなかった。」

でも、ロサ婆さんは昔言ったことがあったっけ」

「昔って、いつ？」

「十二日前」

同年齢の子供より、やや小柄な若君を抱き上げて、男はククツと笑いを噛み殺した。

「キミくらいだと、十日過ぎると昔なのか」

若君は、その男に恐怖心も警戒心も抱かなかった。

ごく自然に抱きかかえられ、そしていつの間にか、男は歩き出していた。

「ロサ婆さんって、キミのおばあちゃん？」

「ちがうよ。ラダックのお婆ちゃん。」

ぼくは、本当はラダックの家の子供に生まれたかった。

だって、毎晩、お母さんが食事を作って、お皿によそって、それから、スプーンだって取ってくれるんだ。台所からすぐテーブルだから、いつもアツアツのスープなんだよ。ちよっと熱すぎるけど、寒い時なんか、すごく暖まるんだ。

それで、こぼしたり、ソースがあごに付いたりしたら、ラダックのお母さんが拭いてくれるんだよ。

そしてね、ラダックのお父さんは、仕事から帰って、そして寝る前にラダックと弟にくつついて、そしていろんな話をしてくれるんだ。

それでね、ロサ婆さんだってすごいんだ。

ボクの母上のアシャのレースを作るんだけど、とっても綺麗な作るんだ。

魔法のようにね。

ススツと糸を抜いてね、それからその糸を、残った糸に絡めてリースにするんだけど、すごく早いのに」

ラヴィロアは、問われもしないのに、息も継がずに語り出した。

「そうなんだ。」

キミは、ラダックのおうちが好きなんだね。

素敵な人達だね」

若君は、その話を聞いてもらえる事が嬉しかった。

両親は、『しょうにん』であるラダックの家族の事なんか、全然興味を持たなかったし、お婆様に言おうものなら、屋敷から出たことを叱られてしまうから。

そして、遊び仲間の子供たちにとっては、それは何も珍しい事ではないらしい。

「あ、そうだ」

若君は唐突に思い出した。

「みんなは、みんなはドコ？」

男は、若君に微笑んだ。

「誰も居ないよ。」

ここには、キミと私、二人だけだよ。

私は長いあいだここにいるんだ。

とても、とても長い間。

だからキミと話すのはとても楽しいよ」

「帰らなきゃ」

若君には、男の言葉はもう耳にはいらぬ。

友達のところに帰らなきゃ。

その気持ちだけで幼児の頭の中は一杯だった。

「楽しかったお礼に、キミには真実を教えてあげよう。

この世界の真実と、そして全ての理を」

風が吹き抜けて、若君は目を閉じた。

「いつか……」

頭の中に、直接声が響いた。

透過する小さな世界2

再び目を開けた時、そこは自分の部屋のベッドの上で、祖母ベイデノン候爵夫人が一番最初に目に入った。

若君の手をしっかりと握っていた祖母は、目を開けた若君を見つめていた。

「良かった……」

何が起こったのか、若君は分からなかった。

ただ、知らない男と話していただけだ。

何を話していたかは忘れたが、祖母に怒られるのだとまず思った。そして、たまらなくお腹が空いていた。

「お婆様、ごめんなさい。勝手に遊びに行ってしまった」

「大丈夫なのね、どこも痛くはない？」

小言も厳しい言葉も無く、ベイデノン候爵夫人はただ涙を流して、その小さな頭を胸に抱いた。

叱られないのだと分かれると、ラヴィロアは言った。

「お腹が空いたんですけど……」

するとベイデノン候爵夫人は、これまで若君が一度も見ただけでもない優しい眼差しを向けた。

「本当に、大丈夫なのね、本当に良かった」

そう言うと、また泣いた。

どうやら、若君は、とんでもない事をしてしまったらしい。

それだけは、ようやく理解した。

その出来事から間もなく、母であるルーサザン公爵夫人が若君のもとに帰ってきた。

母は、若君を抱きしめて、それからすぐにベイデノン候爵夫人に、これまで聞いたこともない怒りにまかせた声で話しはじめた。

その話の中で若君は、ほんの少しの間、と思っていた時間が、三

日間であった事、そして、若君が宇宙海賊に攫われた件について『ほあんぶちょう』の責任を問わねばならない事を聞き取った。

『ほあんぶちょう』はラダックのお父さんである。

そして、責任を問うとは、要するに叱られる、みたいな事なのか、と思った。

「ラダックのお父さんは悪くないよ。ボクが知らない人と話したのがいけないんだ」

若君は母に訴えた。

すると、ベイデノン候爵夫人は新しく母親が連れて来た教育係を呼んだ。そして、教育係に手を引かれ、部屋を出て行かされた。

もう、邸宅のどこでも、若君がひとりになる事は無かった。

ラダックやみんなと遊びたいと思った時、一同は若君の遊び相手として邸宅に招かれた。

若君はもう、みんなの中の一人ではなく、若君のためのみんなだった。

遊ぶ事それ自体は変わらないのに、みんな若君を中心として、気遣いをするのが感じられる。

前のように、楽しくなかった。

そして、何より悲しかったのは、ラダックがよそよそしくなってしまった、その事だった。

その事を気に掛けて、いつもの元気がない様子の若君を見かねたのか、メイドの一人がそつと教えてくれた。

あの事件の責任を取って、ラダックの父親が死んでしまった事を。その時、若君の頭の中から、サーツと何かが引いていった。

ラダックのお父さんは悪くない。

あんなに真面目に生きているのに、ラダックだって、ラダックのお母さんだって、ロサ婆さんだって。

全部、ぼくが悪い。

なのに、ぼくの話は一言だって、誰も聞いてくれない。
なんで、なんで神々は、最も真面目に生きている人に、優しくしないのだろう。

大事な人を失う悲しみを、どうして与えるのだろう。

小さな胸では抱えきれぬ大きな感情の波に、若君は飲み込まれ、泣くこともできずに、その息苦しさに気を失った。

その翌日から、いつも若君の部屋を掃除する担当のあのメイドは、別の棟の担当に変わってしまった。

そういえば、メイド次長のセレンもあの日から姿を見ていない。

本当の事を話してはいけないの？

おばあさまは、僕から本当の事を遠ざけて、それで僕がやった悪い事が無しになるの？

そうしたら、ラダックのお父さんは帰ってくるの？

誰が問いに答えてくれるのだろう。

ウロボロスの守る罪1（ラヴィロア7才）

かの事件から一年後、ルーサザン公爵夫妻が乗った高速船が宇宙海賊に襲撃された。

若君の身代金を支払った後、ラーフェドラス王国軍による大規模な宇宙海賊の掃討作戦があった。

その時に討伐された組織の残党による報復であった。

両親の服喪の間、ラヴィロアは王都サラオーデインティオスにあるホージュオン島の邸宅で過ごした。

邸内は弔問の客でひきも切らず、修道騎士団の者たち、修道士、司教、そして色こそ控えているが贅を尽くした喪服の貴族らが、入れ替わり立ち替わり、小さな喪主に挨拶する。

ラヴィロアはすっかりめまいがしそうだった。

田舎で祖母とまったりした生活を送っていたラヴィロアにとっては、そういう席はとても苦手で、ついつい視線が室内の装飾品とか、目の前にいる相手ではない者の服装とかに気を取られて、とても一点を見ていられない。

その度に、隣に座る祖母が、相手を紹介する仕草をしながら扇の陰でラヴィロアを窺める。

「……次なる騎士団長にご挨拶を」

決まり切った悔やみの言葉に続いて、少年にそう話し掛けた者がいた。

「ザエルと申します。修道会の典礼司祭でございます。

来週の騎士団葬の、手配を任されております。

若様には、お悲しみも大きく、今は何も考えるお気持ちではありませんでしょう。

一切は、我々が準備致しますゆえ、どうぞ、お任せくださいますように」

その修道士は、ラヴィロアをやや見上げるような位置まで跪いた。「典礼司祭様。このたびは急な事ですのに、騎士団葬の手配を任されたとか。

宜しくお願いいたしますよ。

なにぶんにも、残されたのは、この年寄りと、まだ物の理もわからぬ子供ばかり。

なんとも心細くありますから」

「祭司は、猊下がなさいます」

「なんと、猊下ご自身に執り行っていただけののなら、亡き公爵らにも慰めとなるでしょう」

沈痛な悲しみを帯びた声が、少しだけ変わったな、とラヴィロアは感じて、疲れてどんよりとしてしまった意識を、周囲に向けた。

修道士のやさしい眼差しが、ラヴィロアの、眠気をこらえている目に注がれている。

「ときに、候爵夫人、若様は、何時間この席につかれておいです」

「午後からは、そう、四時間余りと」

「若様は、ずいぶん頑張られました。

私が養育を務めておりました学院の幼児など、三十分もじっとしていたら良いほう。

もちろん、お育ちの良い若様を学院の幼児らと同列に語る不遜など致しませんが、そろそろひと休みさせて差し上げてはいかがかとこれから暫く、弔問客は、我々、修道士と騎士団の一群です。

若様には、我々はこれからいつでもお目にかかることができますゆえ」

「そうですね」

夫人の目がラヴィロアに向けられた。

普段は厳しい祖母の視線を向けられて、しっかりとしようと頑張っているが、まぶたが重くて、どうしてもすぐにボーッとしてしまう。夫人の手が、ラヴィロアの頬を軽く撫でた。

ラヴィロアは窘められるかも、と思い、また表情を引き締めよう

としたが、できない。

「公爵というお役目を引き継ぐからには、幼子といえど、そのお役目に足る強い意志を育まねばなりません。

が、今日のところは頑張りました。しばらくお部屋でお休みなさい」

間もなく乳母が呼ばれ、ラヴィロアはつれて行かれた。

そして軽い食事が用意されたが、ラヴィロアはミルクを一杯だけ飲んで、そしてそのままソファで寝てしまった。

ベイデノン侯爵夫人は、それからしばらくして弔問の席を外し、ラヴィロアの様子を見に行った。

窓の外に広がる壮大な夕方の海の景色は、侯爵夫人にとってはずいぶん久しぶりのものだ。

思えば、ホージュオン島の邸宅には、ラヴィロアを一度も伴ったことが無かった。

ラヴィロアはこの家で生まれたが、まだ歩き出すかどうかの頃に、夫人とともに領地住みになった。夫人の躰の厳しさに母がついて行けず、また祖母は祖母で病がちの事を表向きの理由に、次代の当主をきちんと教育したいと、ラヴィロアとともに華美な風潮が支配する当時の王都を離れた。

たぶん、王都で両親と暮らしていたなら、ラヴィロアは市民の子供と交流する機会は全く無く、貴族社会の偏った倫理観のままに育ったのかもしれない。

侯爵夫人は、表向きドームの子供らとの交流を窺めながら、それを時折見ぬふりをしたのは、それなりの意図、つまりは、従来の当主とは別の意識をラヴィロアに育みたかったからなのだろう。

侯爵夫人として、若い頃はルーサザン公爵夫人として宮廷に仕え、絶頂期は前王妃の信頼厚き話相手の一人として、それなりの権勢を誇っていた時期もある。

その頃の宮廷は、一旦修道士として継承の座から退きながら、ア

ストレーデの開示により玉座に就いた国王の統治下、今ほどの華美な風潮は無く、ましてや、いくら貴族の血筋にある子女とはいえ、娼婦とも等しき装いの者たちが堂々と華を競うような場所ではなかった。宮廷に侍る有力貴族の夫人らも、陰ではそれなりの顔を持つて居ようと、洗練された礼儀と格式のある美しい振る舞いを心がけた。それは表面ばかりの取り繕いであっても、礼節を重んじる風潮に満ちていた。

あれこそ、宗主国として、アストレーデ諸国の頂点に立つ国家に相応しい宮廷の姿である。

宮廷は変わってしまった。

前時代の禁欲的な風潮の反動なのか、今の王は全ての事に対して派手好みで、現在の宮廷は享樂的な雰囲気満ちている。

その風潮に息子である公爵夫妻が飲み込まれて仕舞うのは、宮廷を生きる手段とする身には仕方のない事と受け入れた。

しかしそれゆえに、ラヴィロアをそのような風潮が支配する王都で育てる子とは好ましいとは思えず、民に対する憐憫の情を育まねば、領地と民を持つ古家の当主としての資質に関わると感じ、あえて領地で育てる事を選んだ。それは良識ある前国王と、前王妃に至近で仕え、公務にさえ付き従い、市民たちの暮らしぶりを見て来た者としては、当然の感覚であろう。

惜しむらくは、その頃は宮廷への出仕に忙しく、今、ここで無残な亡骸として棺に納められている当主の教育を使用人に任せっきりにした事だろうか。

息子である公爵は、聡明すぎず、野心も無く、あまりに凡庸に与えられた執務を肅々とこなした。自分の趣味の延長からか、流行の文化への援助を惜まず、埋もれた才能を発掘し、磨き上げる事に奔走していた事が、唯一、上流貴族として評価できる点であろうか。

当時も夫人は厳しかったが、ラヴィロアに対してのような隙を作らなかった。教育係に課題を命じ、たまに宮廷の務めの合間にそれを点検して、出来なければ厳しく叱った。

たまに会える母親に叱責され、あの子はどんなに傷ついただろう
か、と夫人は今改めて思う。

可もなく不可もなく、過ぎた野心も持たず、甘言にも素直に応じ
る。身の回りの事にしか関心を持たない典型的な宮廷貴族。

その当時、自分は子供の全てを把握しているつもりでいたが、思
えば我が子の顔をすっかり見ていたのか、いささか自信が無い。

ベッドの上で、ラヴィロアは可愛い寝息を立てている。

普段は、気を張って威厳を示し、貴族にふさわしい振るまいを叩
き込むために厳しく接しているが、その実はこの小さなからだの少
年が愛おしくてたまらない。

領地で、夫人の目を盗んで裏口から走り出るラヴィロアの姿は生
き生きとしていた。帰ってきて夫人の小言を聞く時でさえ、うつむ
き加減でいながら、その瞳はいつも好奇心に満ち、キラキラと輝い
ている。小言が済んで、夫人が去ったとたんに、側にいるメイドた
ちに、だれかれ構わずその日見た物、出来事、自分の心で感じたこ
とを、自分の言葉で、溢れるように話す。話すのが追いつかず、舌
足らずになりながら、言葉にできないもどかしさにくるくると歩き
回りながら。

侯爵夫人は、その声を背中であちゃんと聞いており、そしてその日
々のなかで初めて知った。

こんな小さな子供でさえ、ちゃんと自分の考えを持っている事を。
亡き公爵を育てているとき、子供は自分の考えなど、まだ持って
いないのだと思っていた。

だから、全て正しい事を、教え諭して、その全身に詰め込まねば
ならないのだと。

亡き息子に、その事を謝るべきなのだろうか。

夕景に染まる部屋にひっそりと座り続けていると、これほど可愛
いラヴィロアと、突然の離別の時を迎える息子夫妻の無念に涙を堪
えきれない。

客人の前では古家の女主人として振る舞っていた緊張の糸が、少し緩んでしまったのか。

ひとたび堰を切った涙は、そう容易には止まらなかった。

ウロボロスの守る罪2

ラヴィロアは深夜に目覚めた。

海鳴りが、深い土の地面から死の王国の軍勢を呼び覚ます声に似ていたからだ。

ルーサザン公爵家の王都の邸宅は、孤島をまるまる領有するもので、居城は海に隣接する場所にあったので、絶えず海の音が聞こえる。

ハバドール星域にある領地の居城はドーム内にあり、天候をある程度再現できるとはいえ、疑似の設備にすぎず、ドーム不要の大气をもつ惑星上においての自然の風の音や、まして海の音などは、とても聞き慣れないものだったから。

ベッドの中で目を開けて、その音に聞き耳を立てていると、今度は雷鳴が轟いた。ラヴィロアはびっくりして、思わずブランケットを深く被った。

そしてそれを、アストレーデ神話のなかにある死の宰相の馬車の音だと勝手に思い込んだ。

両親を迎えにきたのか。

それとも、僕も一緒に連れていくの？

そうしてベッドの中で身を固くしていると、静かにドアが開いた。ラヴィロアはその怖れている者が部屋に入ってきたのだと思った。

「ラヴィ、怖くはない？」

それは祖母の声だった。

祖母は、そっとブランケットを剥がした。

ラヴィロアは、祖母に云った。

「あの音、何ですか」

「ドームと違って、お空の神様は地上にいろんな恵みをくださるの。風を使って雲を呼び、雲を呼んで雨を降らせる。」

雨が降ったら、地の植物が喜ぶわ。
領地のように、人工降雨装置が無いから、すべて神様がやってくれるの。

風が強すぎると、海が大きく波を打つし、雲を急に動かすと、雷が鳴ってしまうの。

気にしなくていいのよ。

家の中にいれば、怖くないから」

祖母の声は珍しく優しくかった。

「でも、すごく大きい音。

ぼく、ちよつとびっくりしたよ」

「そうね、慣れないと、怖い音かしらね。あちらの部屋に行きましようか。」

叔父たちの声がうるさいでしょうけど、人の気配があつたほうが眠りやすいでしょう。

そういえば、ラヴィ、あなた、何も食わずに寝てしまったのね。
何か、用意させるわ」

祖母はラヴィロアの手を引いて、客間の隣の控え室に連れて行つた。ソファにラヴィロアを座らせ、メイドにブランケットを出させた。

メイドが Pasta 入りのスープを運んできた。

それを飲むと、お腹が温かくなって、先ほどの怖い気持ちは無くなった。

それからソファに横になって、再び眠くなるのを待つ。

メイドが、部屋の照明を暗くして出て行った。

従家の親族たちと祖母が話している声が遠くから聞こえた。

『まだ幼いじゃありませんか……、いま少し……』

『……あなたが、騎士団長職に……』

『……だから、……ロアがしかるべき年齢に……』

『代行は認めません……』

どうやら、ラヴィロアが公爵位を継承するには小さすぎる、とい

う事について話しているらしいということは理解できた。

両親と一緒に、いつか行きたいと思っていた王都に居る。

王都にいるのに、父も、母も、抱きあげてくれない。

雷鳴が、再び近づいてくる。

眠りが、ラヴィロアを抱き上げる。

温かい光にふわりと包まれて、そっと手を伸ばすとロサ婆さんが忙しく手を動かして、純白のレースを仕上げていた。

「あら、若様こんにちは」

ラダックのお母さんが奥からお菓子を載せたお皿を持ってきた。

「私の手作りですよろしければ、どうぞ、若様。」

うちのおチビちゃんたちのおやつですけど、一緒に」

温かいミルクの香りと、焼きたての甘いカップケーキの匂い。

「おかあさん、あの本で作ったの？」

おいしい」

ラダックが云った。

「そうですよ、あのとき候爵夫人から頂いた本で作ったんですよ。せつかくなら、若様のお口に合うものと思って」

それは、公爵家の料理番の連邦風のケーキのレシピだった。

ひと口齧ったその味は、ラヴィロアがおやつに出される同じ焼き菓子とは明らかに風味が違う。

違うのだけど、とてもやさしい味だった。

そしてふと、冷たい上等の絹の布地が頬に触れる感触を思い出した。

時々逢う時に、頬に触れるお母様のドレスの胸元の感触。

母親に抱かれている時は、指輪や、ネックレスや、襟飾りを摘んで、もてあそんだものだった。

目が覚めたとき、部屋は光で満ちていた。

どうやら泣きながら眠っていたようだった。

……神様、僕は悪い子ですか……

キュツと枕にしていたクッションを握りしめた。

……お母様に会いたい、僕は、お母様に会いたい……

両親が亡くなったと聞かされ、そして領地から王都へと向かう旅の間、その事について考えていた。

ラダックからおとうさんを奪ったのはラヴィロアの母であり、そしてその原因を作ったのが自分にあるということを、ラヴィロアは充分理解していた。

ゆえに、ラヴィロアは素直に両親の死を悲しんでいいものか分からなかった。

あのとき、ラダック自身は、ラヴィロアに自分の父のことは一言も言わなかった。

僕がショックを受けるといけないと思ったラダックのことを思うと、親を慕って泣くこと自体が、とても罪深いものに思えた。

当然の子供らしい感情と、深い罪の意識の中で、ラヴィロアは飲み込まれそうだった。

ウロボロスの守る罪3

父の騎士団葬が済んで一週間が過ぎた。

本来は、そろそろ公爵位の継承式と、修道騎士団長の就任の準備を整えねばならないが、その件について、公爵家に連なる従家、及び修道会内にも異論を唱える者が少なからずあった。

継承するべき当主はまだ七歳。

この場合、従来のしきたりとして、当主がそれなりの年齢に達するまで、筆頭従家の当主が代行するものであったからである。

しかし、ベイデノン侯爵夫人は頑としてそれを認めなかった。

「公爵に立つのは、血筋からみてもこの子をおいて考えられませんでしょう。」

公爵家の当主としての切り盛りは、私の目の黒いうちは、従来どおり私が致します。

騎士団長としての職務は、亡き公爵を支えてくださった修道会の方々も引き続きご助力ただけでしょうし、子供はすぐに大きくなりますよ」

ベイデノン侯爵夫人には、頑なにならざるを得ぬ理由があった。

筆頭従家ガラナ侯爵は、先々代の第二夫人の子である。第二夫人とはいえ、薄からず古家の血統を次ぎ、従家の身分が許されている。ベイデノン侯爵夫人としては、とても好ましく思える相手ではない。性格にしても、昨今の宮廷のあり方に流されるばかりで、とても芯のあるようには見えない。それは、息子であった亡き公爵も同じようなものであったが、この度の凶事は、下々の心を省みない貴族としての風潮が招いたものではなかったかと夫人は危惧する。

なぜ、民が海賊行為に走るのかといえば、それは生活する環境が、普通に働いて、生きるに足る要件を満たさないせいもある。

力ある古家としては、再び対応を誤るわけにはいかない。自分がラヴィロアの背後に立ち、いまだ政治の場に残る侯爵夫人の旧知の

賢臣たちとの連携を図りながら、公爵家としての立場を築こうとする意図があった。

ラヴィロアの幼さに異を唱える者は、一族の者ばかりではなかった。騎士団内にも、暫定空位でよいのでは、という意見もあり、公爵位の継承の件はともかく、騎士団長としての就任の時期もまだ決まっていなかった。

とりあえず、この落ち着かぬ有様では、若君の健やかな育成の場としてふさわしくない。

ベイデノン侯爵夫人は、ひとまずある決断をした。

だが、ラヴィロア本人にとって、そういった事情はどうでも良いことである。

葬儀以来、ホージュオン島の邸宅に暮らすことにはだいぶ馴れたが、廷内は服喪のためにとても静かで、たまにラヴィロアの継承の件で行われる話し合いの他は、しみりとした雰囲気に使われており、退屈したラヴィロアが気持ちのままに子供らしいエネルギーを発散できる様子ではなかった。

乳母は領地に小さい子供を持つ身であったので、葬儀の際には王都に同行したが、こちらが落ち着くと、一旦領地に帰ってしまった。そして、入れ替わりに来るはずの教師はまだ到着していなかった。大人しく読書をする気にもなれず、仕方ないので、広い玄関ホールで、冷たい大理石の床の上に転がって、天井の装飾画を眺めているぐらいいしかやる事が無かった。

たまに床の上で、背中を軸にしてコマのように両足を使ってぐるぐる回転することが楽しいと発見したが、五度もやると気分が悪くなって、すっかり飽きてしまった。

今度はうつぶせになって、頬やおでこで床の冷たい感触を楽しんだりしてみた。そして、床の上に一匹の小さな虫を発見して、おや、と思った。

今度は床に映る柱を数え、そして、また天井画を見上げ、乳房の

形が母上のはとは違うな、と思ったりした。

どんなに頑張っても、そんなに時間は潰れないし、ここには大した玩具も無い。

あの祖母が簡単に新しい玩具を買ってくれるわけもない。

コロンと横になったまま、ボーっとしていると、ラヴィロアの顔を覗き込む男の姿に気づいた。

「若様、退屈なさっておられますな」

いつぞやの修道士であった。

「葬儀の日以来でございます。

ザエルでございます。

これを、総司令より預かってまいりました。

騎士団の司令母艦をもとに作られましたフィギアでございます」

ラヴィロアは箱を差し出されたので、慌てて起きあがり、そして笑顔で受け取ろうとしたが、あまり上手く笑えなかった。

「ありがとう」

普段なら、もっとたくさんの言葉で、嬉しいことを表現できるのに、なんだか気持ちがついていけない。

「お気持ちが晴れないのは、当然でございますよう。

もし、若様がよろしければ、修道会で預かる子らと一緒に、遊んでみられませんか。

少しはご気分も晴れるのではと」

「子供がいるのですか」

「若様と同じほどの子供たちも暮らしております。

修道会は、幼くして親を亡くしたり、ご両親の都合で一緒に暮らすことのできない子らを預かり、育てる仕事もしておりますし、神々の学問を究めるために、幼い頃より修道を学ぶ道に進もうとする子らもおります。

侯爵夫人にお伺いする話では、若様はご領地では領民のお子様方の中に出て行かれ、親しく遊んでおられたとか」

「友達になれますか」

「ええ。若様がそれを望まれるなら。

そして、私と一緒に勉強も致しましょう。騎士団長として、修道会と、神々と、そして騎士団のことについて。

一緒にいらっしゃいますか」

ウロボロスの守る罪4

ラヴィロアは、翌日、修道学院に入った。

ザエルは、その養育を一手に任された。彼は本来、典礼院の司祭であり、こういった場合の仕事は、本来は学院か、養育院が担当するべきである。

典礼司祭の彼が任じられたのは、五年ほど前まで養育院に属していた事と、ベイデノン侯爵夫人直々の依頼があったからである。

侯爵夫人は、普段の屈託の無い孫に戻すには、遊び仲間の中に放り出すのが一番良いと考えた。そして、暮らしになれぬうちは、少しでも面識のある相手のほうが好ましいだろうという上からの判断もある。

高級貴族の子弟には一般市民の子らと遊ばせる事自体、あまり宜しくない事だが、修道学院といえ、貴族の子弟も平等に学ぶ場である。相続と継承の件が落ち着くまで、修道会で必要な事を学ばせることは、むしろ有意義であろうと、総教主もそれに快く応じた。

ラヴィロアの住居には、騎士団でも、学院の領でもなく、総教主棟に隣接する学院にある館が与えられた。本来は外部より教授を招いた際の宿舎であるが、そこなら学院の幼児棟に最も近い。実際の世話には、ついてきた執事二人が担当する。

修道騎士団長とは、本来、三座に権力を分散させている騎士団の他の二座、守護院の院長であるマブリック大司教と、修道騎士団総司令官の調整役が一番の職務である。

立っているだけで良い、などと言われるが、実際は、軍事面での早急な対応と、信仰面からの根柢の背反する意見の調整は難しく、修道会としての思想の理解は必須である。本来、軍事、神学双方に精通する者でなければ、正しい判断を行えるものではない。

現に、これまでの何代かのルーザザン公爵は、第三者として、司教資格を持つ参謀長なり提督なりを相談役としておいた。守護院長が提督職を兼任しているか、総司令官が司教資格を持っていれば、騎士団長としてはその分業ができた。

現総司令官は、司教資格を持つ。

だから、意見のすりあわせには、大して労はいらない。

当面、教主職の誰かに後見を依頼すれば良いだけのこと。

むしろ修道会側としては、古家としての利益の観点からの意見を差し挟まれずに済む。

ラヴィロアが修道会に入った日、ザエルは早速、ラヴィロアをつれて、総教主棟に隣接する大聖堂に案内した。

そして神々に祈りを捧げ、ラヴィロアを祝福した。

それから、聖堂と、祈りについて教えた。

「それで、これまでの事で、なにか質問はないですか」

ザエルが問うと、ラヴィロアは少し考えてから、まっすぐなまなざしを向けて、そして話し始めた。

一年前の、あの出来事について。

「どうして、ぼくの友達は、父君を亡くさねばならなかったのですか。」

「ぼくが悪いのに」

ザエル修道士は、両親を失ったばかりだというのに、人前では悲しみの陰さえも見せないその子供が、友達の肉親の死については深く傷ついている事を感じとった。

「ぼくの友達の家族は、とても真面目に生きていました。」

とても温かい家族で、人を恨んだり、羨んだりせず、毎日をきちんと暮らしていたんです。

神々への祈りも欠かさずに、ほんとうにきちんと。

そしてぼくが遊びに行くと、友達のお母さんが焼いたお菓子もくれた。

なのに、友達はお父さんを失い、そしてぼくは大事な人たちを失った。

ぼくの事はいいんです。ぼくはぼくの悪い事に対して償いをしなければなりませんから。

だけど、それが神々の思し召しというものですか。

本当に大切にすべき人から、大切なものを奪ってしまう。

神々が最も愛されるべきは、日々の運、不運、晴れたり曇ったり
のことに喜んだり、悲しんだりしながら、神々により良く思われようという事など考えず、自分の仕事に真面目に打ち込む者たちではないのですか。

ここで、神々の名を唱えて、美しい言葉で祈っていれば、神様は恵みをくださるのですか。

ぼくにはそれがわかりません。

どうして、ですか」

ザエルは返答に窮した。

信仰の本質について、まっすぐな心が問いかけていたから。

「ここは、それを学ぶ場です。

若様がそれに対して、十分な答えを得られるかはわかりませんが、私がお手伝いしましょう」

その返答は、ザエルの逃げであった。

まっすぐな、無垢な心が透けて見える瞳が痛かった。

傳かれて育った者が、最も弱者の痛みを語る。

幼い姿と拙い声で。

ザエルは祈りだけが神々の歓心を得る道だと思っていた。

それがザエルの信仰を否定する神の言葉のような気がした。

「ぼくのお父様とお母様が亡くなったのは、ぼくの罪のせいですか？
ぼくの罪なのに、母上はぼくを責めず、大切な友達のお父さんを責めた。

だから、神々は、ぼくからお父様とお母様を連れて行ったのでは

ないですか」

「神々は、その息子たる古家の者を罪の代償となさることはありません」

「ならば、古家の者は罪を犯してよいのですか。」

古家の者は、その負うべき罪を、他の者に受けさせて良いのですか。

ボクは認めたくありません。

そんな神々にご慈悲などあるのですか」

「あなたのご両親は、あくまで宇宙海賊の手に掛かった、その事実だけです。」

神々がそれに対して、どのようなご意向をお持ちなのか、それをはかり知ることは我々にはできない。

神々は善悪も優しさもある、あなたのような小さい子を責めるような事はありません。

責められるべきは、あくまで宇宙海賊の者たちです」

ザエルは、そう諭した。

ザエルは、その日、総教主室に赴いた。

若君の滞在の報告のためであったが、来客中であり、一旦退出しようとした。

「待ちなさい、典礼司祭。公爵家の若君は、聡明でおいでだ」

総教主の客である若君が云った。

ノーダヴィダ大公イシス・クリファ。

今は無き古き王国、ノーダヴィダ王国の末裔である。

「猊下、わたしは彼こそ聖アムルテパン修道会の騎士団長にふさわしいと思いますが、いかがですか。」

ごらんになっていたでしょう。

あの子の思いは、修道士そのものだ。

幼い、曇りのない心だからこそ、至った思いであり、もっとも聖ルーリアのご慈悲に近い。

あの子の前では、私など、今回お持ちした修道宣誓書をこのままお出しするのも恥ずかしいほど」

「イシス陛下。」

何度も申し上げますが、私は陛下が修道士になる事をお認めするわけにはまいりません。

古家の者には、正しいつとめがございましょう。

時折、修道にいらっしゃり、神々の道について思想を深めることは自由になさってかまいませんが、絶対に、宣誓書を受け取るわけにはまいりません」

「じゃあ、こうしましょう。

今回は、私はこれを取り下げましょう。

その代わり、猊下は、あの子が公爵位を継承したら、即刻騎士団長に任じるべきです。

どうせ、いずれは任じなければならぬのでしょ。

ならば、世間の水に染まる前に、あの子のままのうちに修道会が教育すべきだと思います」

「それが、神意でございますか」

「そういう事になりますね」

少年は、交差の剣に黒龍紋印が描かれるた騎士団旗の前に立った。マブリック大聖堂の中央の祭壇に、ノーダヴィダ大公イシス・クリファが聖典魔術師の装束で立っている。

臨席する者たちは、全員大司教の肩掛けをつけており、それ以外の者は誰もいない。

対するラヴィロアは、着慣れない堅いスタンドカラーや、ジャラジャラするモールや、その他の装飾が重いし、窮屈に思った。

「我、シエルⅡダルⅡシャハールの名において、黒龍騎士団と新しき騎士団長に、我が聖アムルテパン修道会の守護の職を依頼する」
「つつしんで、はいめい、いたします」

厳粛な雰囲気、あまりにそぐわないあどけない声だった。

胸に、騎士団の徽章をつける。騎士団旗と知恵の蜘蛛の修道会旗が交差して描かれ、その交点にお互いの尾を飲む黒龍と青龍のウロボロスがある。

「もうすぐ終わるからね」

大公が徽章を少年の胸に止めた。

知恵の蜘蛛が抱く謎1（ユルジサンド10才）

緩やかに、雨の滴が尖塔から落ちてくる。

イシス・クリファがノーダヴィダ大公の地位に就いた日も、こんな雨だったように思う。

大公妃に立った少女は、イシスより二つ年上だった。

綺麗な子だと思ったが、それ以上でも、それ以下でもない。正直、あまり親しみを持ってないと感じて、次の瞬間、忘れた。

イシスの中に在る別の魂は、すべての者を等価とみなした。

父も、母も、それ以外の者も、自分と他人との距離はどれも同じだった。

それが、「身のうちに神を宿す」という事なら、そうかもしれない。

神々は、すべての者に平等に愛を与え、そして奪う。

だから、妃を、たとえばそれが初恋の人になるべきだとしても、恋の意識が生まれた瞬間にその他と等価となる。

もし、彼が、普通に男として、女性を愛する事にしたら、この世界のすべてに対して、その様に愛を注がねばならない。

神としての意識と身体を持つのであれば、この世の森羅万象に対して、そのような愛を注ぐことも可能なだろうが、小さな心と不自由な人の身しか持たぬのであれば、それに見合う思いを持つことしか叶わない。

「ユーリは飽きませんか」

「いいえ、全く」

薄暗い書庫の中で、少年は一心に働いている。

今、ノーダヴィダ王国という国は無い。

アールシャド王国が帝国となる時に、飲み込まれてしまった。

その王にはもうアストレーデ聖典が降りないが、古家の血統は維

持され、ノーダヴィダ大公という称号で呼ばれる。

ノーダヴィダ王国の遺産。

その大いなる学術研究機関は、現在は帝国大学と、帝国教会の学術図書館の形で残されている。ノーダヴィダ大公の職務とは、その両機関の総帥を務めることである。

帝国の中にあいながら、交易惑星にも等しい自治権を許された帝国大学は、残されたノーダヴィダ王国の最後の領土とも云えなくはない。

その帝国大学の総帥棟に付属するこの書庫には、現在限られた者しか入れない。

「私は飽きたんだけどな」

「『フォンティラの書』を今日中に探さないといけないのではなかったのですか」

「いいよ、見つからなかったって云えばいいんだから」

「ご講義はどうなさるのですか。」

それに、窓閉めてください。

紙製の本は湿気に弱いんです」

返却された本を片付けながら、目的の本も同時に探す。

実に効率のいいことをする、とイシスは感心して少年の仕事を脚立の上から観察した。

おそらく、自分にはこの膨大な学術機関を継承させる子孫を残せる当てがない。

だから、古家の血筋にあるこの少年に、その役目を学ばせることも、意味が無いことはないのだろう。

「おまえはなぜ、ここに居るのが楽しいんだい」

「本を読むのが好きだからです。」

陛下はお好きではないのですか。

帝国大学の総帥でおいでなのに」

「死んだ者の記憶はおもしろくない。

それはただの記号だ。」

今日も、昨日も、同じ物だよ」

イシスはユルジサンドを問答ではぐらかし、時間をつぶしていた。まじめに働くこの十才の少年は、本来は、ファーマール王国の第三王子である。第二夫人の子として生まれた第二王子とは双子であるが、『夢』を見る能力をもっていた。それを聖典の開示を怪しんだ第一王子の母である王妃によって、帝国教会に預けられた。

すでにそれは、ファーマール王国の王たる者としての、ファーマール聖典の開示は第一王子になされており、後は継承の時満ちるのを待つばかりであった。つまり、それは現ファーマール国王の死を意味する。開示された者がまだ即位してもいないのに、次の者への開示はあり得ないのだが、そんな事は『普通の』者にわかる訳がない。

それが何であるかは、イシスしか知りようがない。

「私は、おまえを見ているほうがおもしろいよ。」

毎日新しい事を知り、少しずつ大きくなる。それでも、小さい頃には戻れないし、知らなかった頃にも戻れない。

一度記されて、文字として世に出てきてしまったものは、もう変わる事がない。

字が滲んだり、掠れたり、虫に食われたりしたほうが、まだマシだよ。

少なくとも、書物の上を時間が通り過ぎた証だからね」

おそらく、目の前の少年には、まだそれは分かるまい。

人は、命があつてこそ、美しい。

その身がどれほど、罪を背負つていようと、悪徳に浸ろうと、弱き心であろうと。

生きている者が一瞬に考える物事の量は膨大である。

イシスにとっては、そのすべてが愛おしいのだ。

イシスの身のうちの『神』は、時々ひどい事をする。

イシスには悲劇が見えるのに、それをただ傍観せよと云う。

温かい身体の中にある膨大な思考と記憶が、一瞬にして消える場

面に立ち会えという。

愛しい者が失われてゆくのは痛い。

それが聖典魔術師シェルⅡダルⅡシャハールの仕事なら、仕方がない。

目の前の少年が、その仕事を受け継ぐ日、その日がきつと、少しでも幸せならいい。

でも、そんな事はないのだと、イシスはもう知っている。

「陛下、これでございますか」

午後になると、書庫は本当に暗くなる。

いや、照明はあるのに、そう感じるのは、イシスのひねくれた魂のせいだろう。

「よく探せたね。」

おかげで私は、今から講義の草稿を書かねばならないのだね。

ああ、そうだ、ユーリ。

近いうちに、修道会の本院から、騎士団長が来るよ。

きみと同じ年頃だから、きっと仲良くできるはずだ」

その出会いが、始まりの一步であるなら、イシスは彼らを出会わないままにしておくこともできたのだろう。

「騎士団長の噂は、陛下からよく伺いました。

楽しみにしていますから、お見えになったら、絶対に対面の機会を作っていたきますよ。

それでは、僕は帰ります。

夕刻の礼拝がありますから」

パタンとドアが閉まり、少年の気配が消えてしまった。

イシスは脚立を降り、少年が置いていった書物を取った。

「いいなあ、修道士は。

やる事があって」

イシスは、その日の残りの時間を、十何通めかの修道宣誓書を書いてつぶすことにした。

「今度は絶対に許可してもらおう」

でないと、大公妃が自由にならない。

夫としての務めを果たす事ができない以上、自分が信仰の道に入るなら、大公妃の称号を残したままでも、自由に恋愛する事を世間が許すに違いない。

整理が途中のまま、机上に置かれた数冊の本の上をハエ捕り蜘蛛が跳ねる。

アストレーデの神話においては、蜘蛛は知恵の象徴である。

忘れ去られ、蜘蛛の巣に守られた書庫の奥に、真の叡智は眠るものとされている。

そしてそれは、今は巻き物の封印としてデザインされ、修道会の紋章となっている。

修道会は、聖典魔術師の作った組織。

その長を任ずる権限は、シェルⅡダルⅡシャハールにある。

だが、そのシェルⅡダルⅡシャハールが修道士になりたいと望むのに、総教主はその願いをきいてはくれない。

「世の中は、ままならないね」

蜘蛛がぴょん、と跳ねて、机の下に落ちた。

知恵の蜘蛛が抱く謎2（サラディン10才）

知恵の蜘蛛が抱く謎2（サラディン10歳）

ファームムール王国の玉座にて、サラディンは兄に代わって国璽を押していた。

国璽は大きく、どっしりとしていて、重い。

国務大臣が手を添えて、正しい位置まで導いてくれなければ、印章はゆがんだものになってしまう。

父王は、病床について長い。

サラディンが六歳の頃、兄ルシフィン・ラジアンドにアストレーデが開示された。兄は九歳で正式に立太子礼を行い、皇太子としてシェードラ公爵の家名を受け継いだ。

活動的でひっきりなしに動いているサラディンとは対照的に、この兄は物静かであった。無口、というより、人と言葉を交わすことがやや苦手な性質で、弟のユルジサンドがまだこの宮廷にいた頃は、弟が長兄と世間との通訳を務めていた。それゆえに、発達遅滞があるのではと噂されたが、現実には知能および身体能力に特に異常はなく、ただ、外遊びよりも静かな遊びが好きだったため、運動能力は同年代の子供よりやや劣っていた。しかしそれは、少しばかり運動に熱心になれば、すぐに回復できる程度のものにすぎなかった。

現在、兄は十三歳であったが、相変わらす人前に出る事を好まず、押印の係をサラディンに任せた。兄は、国務大臣からの主たる案件の奏上を受け、王太后よりそれぞれの案件について病床の父王の意向を聞き、裁可したものに王印を押す。

そして、それがサラディンの下に回ってくると、各大臣居並ぶ場所国璽を押す。

国が、子供の手によって決済される光景は不思議なものだった。そして、その国事行為を司るのが、まぎれもない十歳の子供なの

である。

「兄上、いま、よろしいですか」

熱心に、コンピュータの前でなにやら入力していた兄は顔を上げた。

「いいよ。」

あのね、今、物理演算ソフトでね、機動艦隊の重力シミュレーションやってたんだ」

「俺、この前、帝国の高速攻撃艦のデータ、拾いましたよ」

「それ欲しい。」

このブラウザから落とせる？」

サラディンは兄の脇に座り、キーボードにアドレスを入力する。

「ユーリからメール来ないんですけど、兄上には来ましたか」

「来たよ。」

今、学術図書館付きの研究生で、ノーダヴィダ大公の下で頑張ってるらしいね」

不満そうな表情になったサラディンの肩に、ルシフィンは軽く手を置いた。

「サラとは、近すぎるんだよ、きっと気持ちか。」

近すぎてね、きつと、何も言わないでも伝わるものと思っちゃうんだよ」

サラディンは、探していたダウンロードサイトにたどり着き、エンターキーを押した。

「あのね、兄さん」

「ん」

「俺、まだゴメンを云ってないんだ。」

ユーリが出ていく前の日、寝ているときベッドの上で、ユーリが俺んところに転がってきたから、俺、ガンガンに蹴ったんだよ。

だけど、ユーリ、俺に眠りながらパンチして、全然起きなくて」
「それで」

「侍女に頼んで、ユーリ転がしてもらって、俺も自分の場所で寝たけどさ」

「うん」

「俺、ユーリなんていらないうって思ったんだ」

「今はどう？」

「……聞かないでよ」

サラデインは、すっと椅子を立った。

「ユーリは覚えてないよ。」

あいつ、馬鹿だから」

「じゃ、どうして俺にメールくれないんですか」

「サラがもし、右足なら、左足にメール出すかい？」

おまえたちは、そういうものなんだと思う。

それで、サラのほうからメールはしたのかな」

サラデインは答えない。

「通じてるじゃないか」

ルシフィンは、キーボードの上に指を踊らせながら云った。

「サラ、読み込めたよ。」

すごいね。細かく作ってあるよ。

このキーで前進だね。

砲門回転は……」

サラデインは、再び兄の横に座った。

「多分、ユーリも、サラからのメール、待ってると思うよ」

桎梏の時が見せる夢1（ラヴィロア12才）（前書き）

すみません。

某所でサブタイトル同じの別バージョン違いを読まれた方。

……すべて忘れてください。

桎梏の時が見せる夢1（ラヴィロア12才）

「やあ、来たね」

即位三年を迎える国王シーヴァエドナ十一世グリーダ・エスファナは、初々しい正装姿のラヴィロアを迎えた。

国王の日常の生活の間であるそのフロアに通されることは、国王の打ち解けた友人と、宮中に侍る女たちぐらいの者であろうか。気まぐれに愛を交わす国王に取りいつて、形ばかりの称号を得た高級娼婦らも堂々として、この頃のラーフェドラス宮廷は衰退の前の爛熟した華やかさに満ちていた。

「この度のことは、誠に残念だ。ベイデノン侯爵夫人も、きっと心残りだろう。せめて公爵が成人するまでご存命でありたかっただろうに」

それは、ラヴィロアの祖母であるロザリン・ベイデノン侯爵夫人の服喪が明けて間もなくのことである。

「領地より王都に参りまして早々、陛下の謁見の機会を賜りました事、有り難きことでございます。また、この度は、身罷りました祖母への弔意のお心遣いばかりでなく、直々のお言葉まで賜り、誠に痛み入ります」

跪礼にて挨拶を述べる、まだ子供らしい表情ながらも古家の当主に相応しい毅然とした少年に、国王は云った。

「そう堅苦しくならずともよい。

招いたのは私のほうだ。そう格式ばるな」

国王は、少年に笑顔を向けた。

「ここは私のプライベートな場所だ。王が許すと云ったのだから、楽にせよ」

侍従が国王の指図を受けて、ラヴィロアに椅子を勧める。

だが、ラヴィロアは固辞し、姿勢を崩さない。

「侯爵夫人から、よほど厳しく躰けられたと見える。

宮廷人として、大人の中で立ち回るなら、それくらいの気概は必要なのだろうな。

ところで本題に入るが、公爵家の筆頭の従家はガラナ侯爵となるであろう？

彼を公の後見と見なしてよいか」

ラヴィロアは問われて、即答した。

「いえ、陛下。この身は若輩ながら、当主として独り立ちせよと祖母から言いつかりましたので。

何分、ガラナ家と祖母は縁が薄くございますので。どうかお察しください」

古家には、その血統の維持のために、公爵家の当主から血縁の近い家系二系統から三系統を侯爵、伯爵に任じ、それを従家となす。

通常は、当主を継ぐ者の兄弟がそれを担うが、兄弟の無い場合、先代の従家がそれを引き続き担う。従家の縛りから外れた家は、当主の死まで侯爵、伯爵を名乗ることができるが、その後継者は貴爵位に任ぜられる。ただし、夫人の称号は当主の死後も許される。

しかし、ベイデノン侯爵夫人は、ガラナ侯爵を信用してはいなかった。

病床にある間も、何かと公爵家の采配に干渉し、隙あらば一族の当主の権利を我が物としようと狙っていた。

侯爵夫人の睨みと、家令として一切を取り仕切るサディール青貴爵によって上手くかわしてきたが、現時点で、後見として正式にラヴィロアの補佐をする事になれば、ラヴィロアを傀儡として一族の実権を握ることは目に見えていた。

「そうか。後見などいらぬか。

そなたの家令は、ベイデノン侯爵夫人の甥御であったな。身分こそ青貴爵だが、古家の血は濃いと聞いた。そのような事情なら、そなたの家令の爵位を引き上げて、一代限りの伯爵位を任じてもよいが、どうだ」

「お心遣いはありがとうございますが、我が家の家令は、あくまで我

が家にしか居りませんでしたので、宮廷での後見としては、他家の手前、かえって問題を生じることでしょう。

そのお心だけを、頂戴しておきます」

十二才の少年としては、完璧な返答であった。

国王は、その思慮に興味を持った。

「公爵家の事情など、余も宮女らの噂話で耳にしている。公爵家の奥方であったそなたの祖母と、第二夫人の確執がどれほどのものであったか。

せめて、先のルーサザン公に、いま一人の同母の兄弟が居れば心強かったものを。

しかし、きみのような幼い者が無理に宮廷に侍る必要もないが、さりとて領地に籠もりきりというわけにもいくまい。公爵には修道騎士団の職務もあろう。

それを口実に、従家が家業の全体の経営にも立ち入ってこような。いかに、優れた家令が居ようと、公爵家の後見として認められた者の采配に従わぬことは出来ぬであろう。

公爵は、年齢に似合わぬ器量を持つようだから、たえそうなるうと、相応しい年齢となればじきに実権を回復するだろうから、それは杞憂というものだろうが。

今、ガラナ候爵を牽制しようと思えば、他家にパイプを築くという道もあるが、この華やかな孔雀の園には、孔雀の羽を纏ったハゲタカも多い。

後見として、庇護を求める相手は、少しでもこの国に対して大きな権限を持つ者が良いだろう？」

国王は、少年の態度を賞めるように観察しながら、その身の上の危うさを説く。

少年にとって、国王のその指摘は当然のだが、とりたててそれ在这个場で強調する真意は測りがたかったが、それにどのような意図があるうと、その興味を味方につけることは有益と思えた。

「だから私は、きみに、この宮廷での仕事を与えようと思うが、ど

うだろうね。

その代わり、私がそなたの身の上の後ろ盾となるが」

少年に与えられた宮廷においての仕事とは、王弟ランディラ公爵グラノー・カレルナの学友として、定期に王宮に出仕する事だった。ラヴィロアは、その職務について明かされて、ほっとした。

その職務は、確かに王弟と同年代のラヴィロアでなければ務まるまい。

グラノー殿下の許に招かれるのは、これが最初ではない。

三年前に国王が即位し、王弟としてグラノー・カレルナがランディラ公爵の座に就いた頃から、誕生会やピクニックなどには時折招待されていたし、勉強に関する視察や観覧にも同行したこともある。国王は、それを公式に依頼して職務とすることによって、少年の地位を安定させ、そしてゆくゆくはルーサザン公爵として盤石たる地位を築くであろうラヴィロアを、自らの手駒として育成する意図もあるのだろう。

だが、一方で、国王が王子を授かり、ルーサザン公爵が宮廷にある程度の立場を確立することとなるなら、第二位の席に退く王弟との極端に深い交流を持つことは、生まれ来る王子にとって脅威にもなろう。

いくらラヴィロアが子供だとはいえ、公爵家に関わる従家らの野心や欲望、そして宮廷に漂う気を許せぬ視線にさらされてきた身であれば、それを推察するくらいの知恵はあった。

それは過ぎたる危惧かもしれないが、国王には、ラヴィロアが国王に対する忠誠を負わせるにかなう存在となる確証があるのか。

まだ、アストレーデが王弟、あるいはまだ生まれぬ王子のどちらに開示されるものかもわからない。

国王は、ただ単に、古家のこのまだ弱い立場の少年を、王家の忠実な従者となすつもりなのかもしれない。

いずれにしろ、それは、貴族としての栄誉だけに留まらず、宮廷内に人脈をつくるための最初のステップとして、ラヴィロアは当然

受けるべき王命なのであろう。

自然戒律による医療制限の縛りは、いつでも突然の国主の崩御の危険をはらむ。

ゆえに、王家内部での過ぎたる抗争は、血族の滅亡を招き、王権の他家への移譲に結びつく。

ラヴィロアは、瞬時に答えを出した。

「陛下、この身で叶いますならば、ぜひお役にたちとうございます。殿下の友として、ともに優れた教授陣の叡智に触れる機会まで頂けるならば、この身にはお断りする理由はまったくございません。

陛下のご恩情に対して、さらなる感謝を申し上げます」

儀礼にのっとり、恭しく頭を垂れるラヴィロアを、国王は冷めた目で見下ろした。

「大げさな世辞などいらぬ。教授の質なら修道会のほうがいくらかも勝っております。

修道会のお飾りの人形のお前は、かの学術図書館長であるノードヴィダ大公の講義も受けたのであろう。今度、本山にお越しの際は、我が弟にも、講義を受ける機会を作ってやって欲しいものだ。

それに、覚えておくがよい。

そなたのように幼い者が、小賢しい風情で型どおりの世辞を口にするなど、時によっては皮肉にもなるのだ」

国王は椅子より立ち上がり、ラヴィロアの前に膝を付き、その細い顎を片手の指の先で押し上げた。

少年の顔を、王の視線がまっすぐ射貫く。

「子供らしくにしていればよい。……お前はな」

耳許で囁かれ、ラヴィロアは背筋がゾツとした。

その恐怖の正体を、ラヴィロアはどう判断していいのかわからなかった。

桎梏の時が見せる夢2（ミスチア10才）

姉王女の部屋に続く廊下を、ミスチアはできるだけ音を立てないように、それでいて軽やかで優雅な足取りを心がけながら歩いていた。

ラジサンドラ王国の太陽の日射しは強く、建物は窓を小さくしてその影響を受けぬように作られていた。

姉王女は今日もミスチアに語る。

姉王女が降嫁することが決まった古家は現在ラジサンドラ王国の筆頭であり、婚約者の少年は姉王女の元に頻繁に遊びに来た。

その二人に加わってミスチアもゲームを楽しんだりするのだが、その仲の良い様子は、時折ミスチアにひとりだけぽつんと孤立した感じを抱かせた。

それは、ミスチアが二人よりも三つも年下で、話題についていけないせいもある。

でも、もつと根本的なものの何かが違う。

そう思った。

ミスチアは望まれて王家の養女となった。

そして、ラーフェドラス王家に嫁ぐことが決まっている。王妃として。

最初は、姉王女が嫁ぐ予定であった。しかし姉王女を健康を理由に、国王は古家の血統の正しいミスチアを養女にし、これを姉王女の代わりに嫁がせる事に決めた。

王妃としての公務に耐えぬため、として、ラーフェドラス王家にも了解を求め、そして今、ミスチアがラーフェドラス王妃となるべく、教育を受けている。

姉王女は、小走りでミスチアの前を走り抜け、婚約者とともに遮光ドームに守られた中庭に出てゆく。

とても公務に耐えぬゆえの辞退とは思われない。ただ、その将来には、仲むつまじい古家の夫人としての、幸福な暮らしがあるように思えた。

秋の頃、ミスチアは図書室に一人残されて、読み飽きた書物の絵を開いたまま、うつらうつらと眠ってしまったことがあった。

気がつくと長椅子に横たわり、薄いブランケットが掛けてある。気持ちがいので、そのまま目を閉じてまどろんでいると、侍女たちの声が聞こえて自分が王妃として嫁ぐに至った真実を知った。

当初、ラーフェドラス皇太子はランディア公グラノーであり、姉王女のほうが少し年上になるが、ちょうど釣り合いのとれた微笑ましい婚約であった。

ところが、この頃、ちょっとした異変があった。

ラーフェドラス王国のファーマール王国の国境線にあるイドリア星域のフランティア星付近、そのあたりの廃棄された鉱石惑星に住み着いた流民に、反政府軍組織が介入した。討伐を任されたのは、ラーフェドラス王族であるソルドレア伯グリーダで、採掘ドームの再利用を目的とした討伐であったので、地上戦部隊が投入された。

そして、その際、流民の抵抗が激しく、やむなく全員死亡として報告されたが、真実はソルドレア伯による虐殺であった。女性や子供も容赦なく、その様は凄惨を極めたというが、公にはされていない。

その事件の直後、ラーフェドラス・アストレーデ聖典の開示が行われたことが正式に公表され、グラノーは継承位を一位退き、ソルドレア伯グリーダがランディア公として、あらためて皇太子となった。

公式に否定されているとはいえ、愛娘を恐ろしい虐殺の疑いのかかる者になど嫁がせる気持ちにはなれず、急遽ミスチアを王女に仕

立て上げ、この恐ろしい新しい皇太子に差し出すことにしたのである。

眠ったふりをしながら、その話を聞く間、ミスチアは恐ろしくて背中が凍り付いた。

その虐殺の話を、幼い頃に父親と身分にふさわしくない取り巻きたちが、酒飲み話にしているのを聞いてしまったからである。

まさか、王妃は殺しはしないでしょう。

それでも、伝説の中には様々な狂王の話がある。

太陽系連邦の地球の古い話には、宗教的な理由で離婚ができないので、結婚した王妃を次々に殺して新しい王妃を迎えた王もいたという。

リボンをくれた少年は、まだミスチアのことを愛してくれているのだろうか。

あのとき、そのリボンの意味を知り、そして自分が頷いて一緒に生きることにしたなら、こんな怖い思いをしなくて良かったのだろうか。

嫁ぐことは、死者の国への階段を踏むように思えた。

あのリボン、どこにやったのだろう。

ミスチアは思い出そうと記憶の中を探った。

桎梏の時が見せる夢3（ラヴィロア14才）

「ルーサザン公、早すぎないか」

皇太子ランディラ公グラノー・エスファナは、着慣れない国軍候補生の制服を窮屈そうに身につけていた。

「殿下、馴れない事ですから、早めに行動するのが肝要かと存じますが。皇太子としてのおつとめであれば、行事は王族に合わせてくれますが、今回、殿下は一学生としてのご身分で学園生活を送るのです。行事の進行は本来停滞されるべきではありません。ましてや、王族をはじめとして、古家の我々が絡むと、馴れない集団の側では特に配慮なさいますので、余計に時間をとらせます。」

先日来、申し上げているとおり、キビキビとしてくださいませ」ラヴィロアも同じものを身に付けていたが、中身の尊大さに比べてやや貧相な感がある。制服は着慣れているのでそれなりに見えるにしても、ベージュの候補生の制服に騎士団の黒の制服ほどの威圧感はない。

「なんか、窮屈で落ち着かない」

ラヴィロアはそう云うグラノーの制服の襟を少しいじった。

「少しはいいですか」

「まあ、少しはね」

「今日から寮住まいですが、なに、心配いらないですよ。僕がいますから。」

同じようにすればいいんです。その代わり、勝手は僕が許しませんで」

「頼むよ、ラヴィ」

その年、ラヴィロアは十四才となり、来期よりランディラ公爵グ

ラーノの国軍予備学校の入学に合わせて、一時的に国軍予備学校に入学することになった。

それは国王の依頼があったからで、宮廷しか知らず、かしずかれて育ったラーノの生活を、修道会において寄宿生活になれたラヴィロアと一緒にいることにより、少しでも快適に過ごせるようにとの配慮ゆえであった。

おそらく、ラーノ一人で入学させるなら、せっかくの鍛錬であるのに、寄宿舎側の対応やらを考えると王族として特別扱いされかねない。ラヴィロアが一緒であれば国王の意図を汲み、集団生活に対する甘えも抑えることができるという面もある。

国王グリーダは元軍人である。継承位が低く、母親であるバレイユ妃も貴爵家の出身であったので、自ら望んで王族でありながら国軍予備学校から貴族の師弟向けの上級士官学校に行かず、そのまま軍務について下士官から始めた。アストレーデ聖典の開示直前の頃には、地上攻撃師団の中佐となった現場主義者であり、非現実的な宮廷儀礼と、生ぬるい人間関係を何より嫌った。その一端を学ばせるべく、将来軍に身を置くとはどうい思えないグラノーを予備学校に送り込んだのである。

グラノーが地上車から降り立つと、周囲は騒然となった。校門の前を一般人が列をなし、学校に一步入れば、校内中が遠巻きにしてグラノーを注視している。

注視されているのは、ラヴィロアも一緒であるが、ラヴィロアは至極自然にそれに無関心で歩いて行くのに対して、グラノーは思わず手を振ってしまう。

「公式行事ではありません。殿下は、あくまで学生の身分ですので、校内に入られましたら、全て無視なさいますように」

ラヴィロアがバッグを差し出して忠告する。

「殿下、ご自分でお持ちください。私は殿下の侍従ではございません」

「あ、ああ、ごめん」

素っ気ない態度のラヴィロアからバッグを受け取り、思わず謝る。

入学式はあっけないほど型どおりに進行してつつがなく終わった。その後、入学三ヶ月は、専門科の区別なく基本的な行動訓練を行う。この予備学校の門を叩く大半の者が大貴族の師弟であり、領地において、学校ではなく家庭教師によって教育された者も少なくない。よって、集団生活そのものから始める必要があるのだ。

最初、各人寮に振り分けられ、当然特別な配慮なのだろう、グラノーとラヴィロアは同室であった。四人部屋であり、他に古家であるエイオラ公爵家のユーラ・エランドラ、

そして、各寮の階ごとに寮長が決められ、全てのことが寮長の指揮によって行われる。

寮は階段を挟んで翼状になっており、男子と女子に別れるが、階ごとなので寮長の指揮下に入るのは男女とも同じ階の者同士である。寮長は、三ヶ月ごとの試験の成績で決まる。最初の三ヶ月は、振り分けられたメンバーの中の入学試験での最終者ということで、平民出身の女学生ベリア・エルダに決まった。ラヴィロアは試験の当日は修道会の行事で抜けられず、後から特例で入試を受けたので、試験の上の成績は同点であったが、最初からペナルティとして減点されていた。

教官の指示に従い、第一日目は無難に過ぎた。

グラノーは無難というわけにもいかず、日常のことをラヴィロアはいちいち教えなければならなかった。

寮のビュッフェでは、自分のトレイを取って並び、用意してあるものを自分でいちいち取ることや、嫌いなものは少し、好きなものは多めに、でも一人ぶんづつ分けてあるものは例外というふうに。

ラヴィロアが暮らしてきた場所が修道会だったので、予備学校の寮よりもさらに厳しい戒律が課せられていたので、むしろここのほうが楽であったが、グラノーは1日めにして、少しくたびれてしまっていた。

就寝の点呼は、全員廊下に出て、自室の扉の前に並んで行う。その場で翌日の行動予定やらも確認されるので、非常に重要な時間である。

初日なので、寮長に教官がついて指導して点呼を終え、そのまま就寝となった。

消灯まで、二十分ほど間があり、歯を磨いたり、少し本を読んだり、翌日の予定を確認したり用意したりなどをする。

だが、グラノーは消灯を待たずに、すぐに夢の中に行ってしまった。

ラヴィロアは、修道宣誓こそ行っていないが、修道士の初戒を学ぶ身である。

就寝用意の時間に、自室で略式の就寝前の礼拝を行う。一切を無駄にせず、神々の恵みと、慈悲を祈り、それからベッドに入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6006h/>

vermilion 前章

2011年9月10日18時36分発行